

2012 October No.218
百万石蝶談会

翔



ヒサマツミドリシジミの産卵部位について

勝海雅夫

2011年10月、金沢市犀川ダム周辺にて、ウラジログシからヒサマツミドリシジミ182卵を確認した。確認した産卵部位を、同時に確認した他種とともに報告する。

表1. ウラジログシの産卵部位と産卵数

	花芽産卵数	産卵位置	葉芽産卵数	産卵位置	その他産卵数	産卵位置
ヒサマツミドリシジミ	10	a	12	e	1	h
ヒサマツミドリシジミ	4	b	52	f		
ヒサマツミドリシジミ	71	c	15	g		
ヒサマツミドリシジミ	17	d				
計	102		79		1	
アイノミドリシジミ	3		7			
ウラムスジシジミ	1		2			
アカシジミ	4					

(注)産卵位置の記号は産卵位置図の記号を示す

ヒサマツミドリシジミは、一般的に花芽を好むが、上記表に有るよう
に葉芽の状態と場所が良ければ、花芽に限らず葉芽の基部にも多く産卵する。11月末には、駒帰大橋周辺の犀川兩岸のウラジログシより、複数卵を確認しているの
で、今後の産卵確認の一指標として、更なる確認に利用していただければ幸いである。

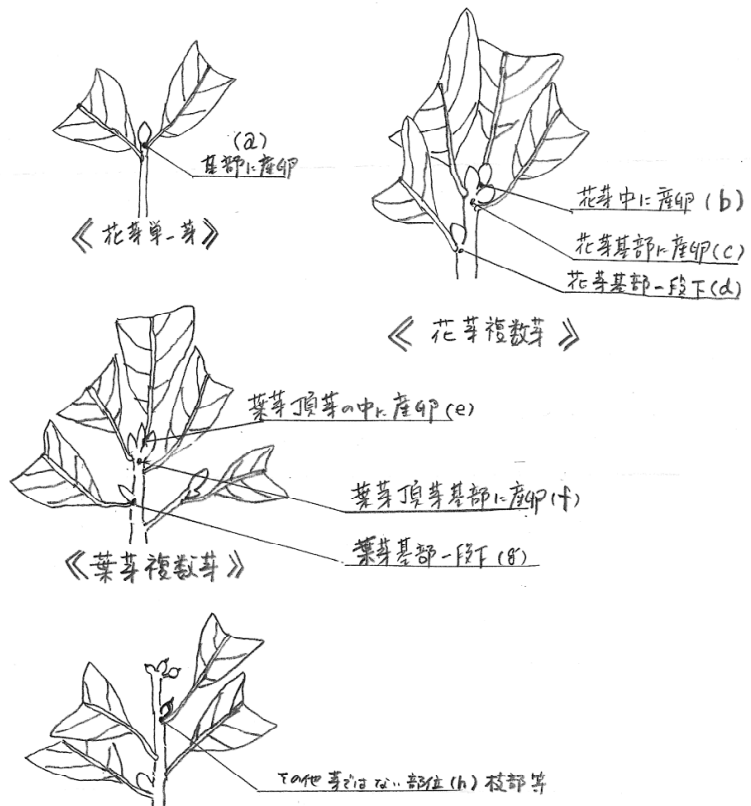


図1. 産卵位置図

《かつみ まさお 〒921-8051 金沢市黒田1丁目49-1》

ギフチョウの異常型を撮影

田 辺 幸 雄

カタクリが咲き乱れる金沢市の平栗いこいの森へ、毎年ギフチョウの撮影に出かけていますが、今年のギフチョウ撮影会(参加者約1名、本人のみ)にて、左前翅の異常型のギフチョウ♂を撮らえたので、報告します。



2012年4月16日 石川県金沢市平栗 1♂ (異常型) 田辺 幸雄 撮影

《たなべ ゆきお 〒920-0275 内灘町旭ヶ丘158》

表紙のむし ースジアカクマゼミー

2001年に日本で初めて見つけたが、その場所は、自宅の目と鼻の先だった。すでにかかなりの数が鳴いていたにもかかわらず、不覚にも全く気付いていなかった。翌年からは、自宅からでも年に1度は声を聞くようになり、年を追うごとに回数が増え、今年は自宅の庭でもたびたび鳴いていた。

松井正人

石川県金沢市、富山県旧上平村、富山県旧福光町のクロシジミの記録

松井 正人

白山から北方に伸びる稜線が奈良岳に至ると西側が金沢市、東側が旧上平村となる。更に北へ進むと稜線は二分し、順尾山方向へ進むと西側が金沢市、東側が旧福光町となる。奈良岳から三方山方向へ進むと西側が旧福光町、東側が旧上平村となる。この付近に降る雨は、金沢市では犀川、旧福光町では小矢部川、旧上平村では庄川に注いでいる。クロシジミが観察されている地域は、この辺りを中心に石川県と富山県にまたがっており、金沢市の犀川流域は、石川県における唯一の地域になっている。

観察されている時期は1950～1970年代で、石川県では1978年、富山県では1976年の観察を最後に、その後は観察されていない。この時期、金沢市の犀川では1966年に犀川ダム、犀川支流内川では1975年に内川ダムが完成し、旧福光町の小矢部川では1967年に刀利ダムが完成し、小矢部川支流打尾川では1975年から白中ダムの工事が始まっている。このダム工事に前後して、犀川では倉谷、二又新、日尾、見定が離村、内川では後谷（菊水）、堂が離村、小矢部川では、下小屋、中河内、瀧谷、刀利、下刀利が離村、打尾川では白中が離村している。

クロシジミは、人手が加わり遷移の途中にある不安定な環境に生息しているが、かなり局地的な分布をしている（福田晴夫ほか、1984）とされ、このことから次のようなことが想像させられる。この地域には、人が住む前からクロシジミが細々と生息しており、人が住み人手が加わる事によってクロシジミの好む環境が広がって個体数が増え、人目に付くようになった。その後、人が消え手が入らなくなると、再びかつてのような細々とした生息に戻ってしまった。

この地域のクロシジミは、決して居なくなった訳ではなく、極端に少なくなったものの、ほそぼそと命脈をつないでいると思われる。個体数が大きく減り探し出すのは困難を極めるが、時間をかけて調査を進めれば必ずや見つかると思われるので、この地域におけるクロシジミの記録を紹介し、今後の資料としたい。

《 参考文献 》

- 出嶋利明(1991)石川県におけるシジミチョウ4種の記録. 昆虫と自然 26(2):25.
- 福田晴夫ほか(1984)クロシジミ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ):216-221.
- 福光町教育委員会(1971)小矢部川峡の自然. 92pp.
- 今井宏三・勝田 博(1957)金沢市近郊の蝶を追加す. とっくりばち(5):9.
- 嵯峨井淳郎(1983)採集地案内4 富山県東礪波郡平村. 翔(41)8-9.
- 武藤 明(1959)金沢附近の蝶数種について. 新昆虫 12(5/6):40-41.
- 富山県昆虫研究会(1979)富山県の昆虫. 545pp.
- 土田豊成ほか(1953)富山県産蝶類目録(予報). NEOZEPHYRUS 2:20-30.
- 横山憲次(1985)富山県呉西地域の蝶. 雷蝶(1):1-14.
- 吉村久貴(1978)犀川上流のクロシジミ. 翔(2):4.
- 吉村久貴(1998)実在した菊水のクロシジミ標本. 翔(135):1-2.

表1. クロシジミの観察記録

■石川県金沢市

1957年7月14日	金沢市日尾	1♀	今井 宏三・他	今井宏三ほか(1957)
1958年7月29日	金沢市二又新	1♀	中村 繁	武藤 明(1959)
1958年8月4日	金沢市二又新	1♂1♀	中村 繁	武藤 明(1959)
1970年8月2日	金沢市菊水～堂	2♀	鈴木・土谷	吉村久貴(1998)
1973年7月6日	金沢市犀川ダム付近	1♂	出嶋 利明	出嶋利明(1991)
1978年7月18日	金沢市寺津～犀川ダム	1♀採集1♂目撃	吉村 久貴	吉村久貴(1978)

■富山県旧上平村(現在の富山県南砺市)

1951年8月28日	上平村菅沼		田中	土田豊成ほか(1953)
1962年7月23日	上平村小瀬	2頭	嵯峨井 均	嵯峨井淳郎(1983)
1970年7月29日	上平村西赤尾	3♀	横山 憲次	横山憲次(1985)
1976年7月22日	上平村菅沼～上中田	1♀	前沢	富山県昆虫研究会(1979)

■富山県旧福光町(現在の富山県南砺市)

1966～1970年頃	福光町内尾川ダム		小矢部川峡調査員	福光町教育委員会(1971)
1966～1970年頃	福光町内尾川鎌倉橋		小矢部川峡調査員	福光町教育委員会(1971)
1966～1970年頃	福光町下小屋		小矢部川峡調査員	福光町教育委員会(1971)
1966～1970年頃	福光町不動滝谷		小矢部川峡調査員	福光町教育委員会(1971)

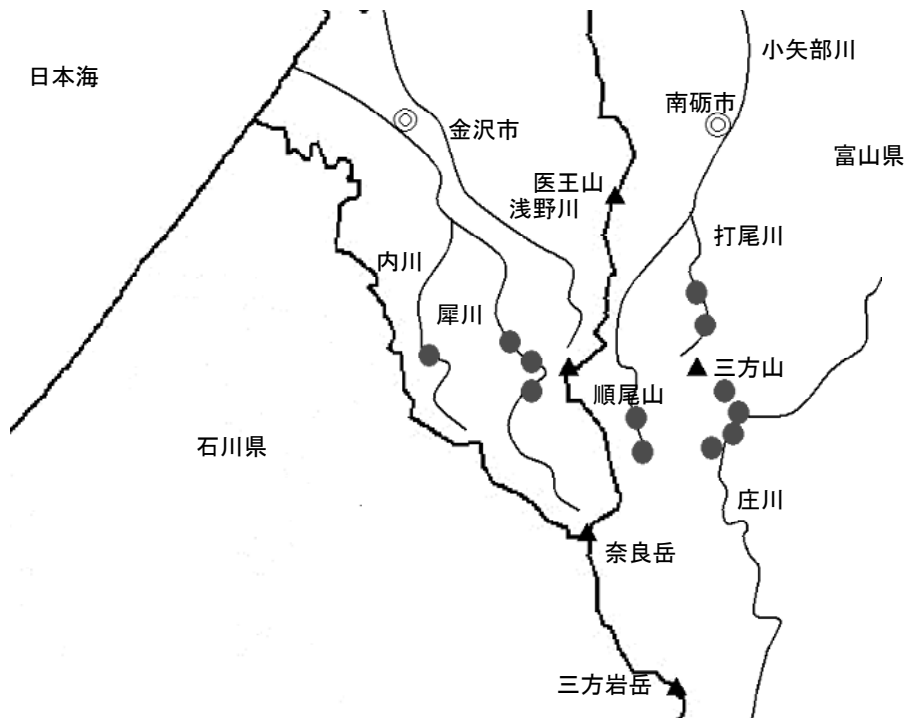


図1. クロシジミの観察場所

《まつい まさと 〒920-3121 金沢市大場町東871-15》

7大陸で網を振る・・・2012年のたわごと・・・

指田 春喜

世界には大陸が7つある。アジア、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、オセアニア、アフリカ、そして南極である。登山家の中にはこの7大陸の最高峰登頂を目標にする人も多いと聞いたことがある。ちなみにその最高峰をご存知であろうか。順番にチョモランマ（サガルマータ、エヴェレスト、8848 m）、エルブルス（5642 m）、マッキンリー（6194 m）、アコンカグア（6959 m）、コジオスコ（2228 m）、キリマンジャロ（5895 m）、そしてヴィンソン・マシフ（4892 m）である。虫屋なら、この7大陸で網を振ってみたいくなるのは、当然の思いではなかろうか。

当方、台湾を皮切りに海外（東南アジア）での採集をはじめ、マレーシア、ボルネオ島（マレーシア領）、ラオス、ヴェトナムと2000年までかなりまじめに（？）これらの国々で採集した。その間にもインドネシア、ミャンマー、インド、タイ、韓国、中国などでもネットを振る機会もあったが、これらの国では、取り立てて言うほどの成果は得られていない。その後（正確には、少しその前も含む）、仕事でも南北米、欧州、豪州に出掛ける機会が多くなり、アメリカ、カナダ、ブラジル、イタリア、スロヴェニア、英国、ポーランド、ベルギー、フィンランド、ドイツ、エジプト、オーストラリアなどに出張の折、忍ばせたネットを振ったが、これらの国では、ほとんど何も採れなかった。ペルーとメキシコへは採集目的に入り（正確な日本語を使用すると、「連れて行ってもらい」）、アグリアス、モルフォ、プレボナなど目的の種も採れ、十分に蝶の採集を楽しむこともできた。

以上のことを要約すると、世界6大陸で網を振ったが、アジアと南米以外では採集を行っていないことになるのか。残る一つは、もちろん南極であるが、ここでも「網を振ることはできるが、採集はもっと困難であろう。」しかし、機会があれば、ネットを忍ばせなくとも行ってみたい場所のひとつであることは間違いない。いつかは「6大陸でなく、7大陸で網を振りたい」と思っている次第である。

《さしだ はるき 〒920-0931 金沢市兼六元町 11-27》

短 報 2 1 8				
トゲナナフシ	2012年6月10日	金沢市卯辰山	2 幼	浅地哲也
エダナナフシ	2012年7月15日	南砺市医王山辻堂	2 幼	浅地哲也
エダナナフシ	2012年7月16日	白山市白峰百万貫岩	5 幼	浅地哲也
エダナナフシ	2012年9月 2日	金沢市医王山馬の背	2 ♀	浅地哲也
ヤスマツトビナナフシ	2012年8月11日	金沢市月浦	1 ♀ 目撃	松井正人
シラキトビナナフシ	2012年8月12日	白山市赤谷	1 ♀ 目撃	松井正人

アンボン・バリ撮影紀行（下）

松田俊郎

■ 2012年2月4日（土） 再び、Airsakura Villageへ

今日は、ルディー君が見つけたポイントへ行くそうだ。昨日と同じく、Airsakura Villageを過ぎてしばらく行ったところで、車を止めて歩き始める。午前中はガイドの青年の一人が、私の荷物を持って、ずっと付き添ってくれた。河原につけられた道を行くと、スジグロカバマダラ(*Salatura genutia*)が、紫色の小さな花で吸蜜しているのを見つけた。キクのような黄色い花で吸蜜していたのは、イワサキタテハモドキ(*Precis hedonia*)だった。石垣島等で迷蝶として採集されているものとは、やや色合いは異なるが、眼状紋などの斑紋パターンから判断すると、やはりイワサキタテハモドキだ。(カラー写真I)



吸蜜するスジグロカバマダラ

それからいくら行っても人影が見えないので、他の人達は途中で林の中に入ったのか、すでに引き返したのかも知れないと思い、ここらで戻ることにした。ガイドの青年が、何か見つけたようなので行ってみるとオオルリマダラ(*Euploea phaenareta*)のメスだった。この種のオスはバンティムルンで見ているが、メスの方は初めてだ。ルリマダラの類では、最大種だったと思うが、さすがに大きい。12時頃、対岸にツマベニチョウのような蝶が飛んで来た。ここには、ツマベニチョウはいないはずなので、ヒロツマベニチョウ(*Hebomoia leucippe*)だろう。しかし、忙しそうに花から花へと飛び移るので、満足できるような写真は撮れなかった。結局、ルディー君が見つけたというポイントへは行けなかった。



オオルリマダラを手にするガイドの青年

村に着くと、他の人達はすでに戻って来ていた。冷たいジュースを飲んで、昼食休憩にする。また、スコールだが、そのうち止むだろう。午後は、この村の周りで観察、採集することになった。

村はずれに細い山道があった。何かよさそうな雰囲気だったので、その道を上って行く。アリメナムラサキのオスがテリトリーをはっている。(カラー写真J) 新鮮な個体で、帯状の青が鮮やかだ。ふいに飛び立ったのは、ウスイロコノマチョウ (*Melanitis leda*) だった。木の幹に止まっているのは、ムシヒキアブの仲間だろうが、色が鮮やかだ。よく見ると口先に小さな虫を捕まえている。

先に進むと、葉上にアカハレギチョウ (*Cethosia chrysippe*) が、とまっている。(カラー写真K) 今日、羽化したばかりと思われるような、新鮮な個体だった。近寄ってもあまり逃げず、羽の表面ばかりでなく裏面の模様も独特なので、一人で感心しながら撮影した。ハレギチョウの仲間は、トケイソウという毒のある植物を食草として体内に毒を蓄えているそうで、比較的ゆっくり飛ぶのは、そのせいだろうか。このハレギチョウも、赤と黒の派手な衣装だが、この色合いは、捕食者である鳥などに注意を促すための警戒色なのだろう。



ムシヒキアブの一種

さらに先に進むと、コンロンカの木があって、やはり黄色い花が咲いている。この木の近くで待っていると、どこからかオオルリアゲハが飛んできたが、吸蜜はしないで飛び去ってしまった。下の方から山本さんが上って来たので、一緒にここで蝶を待つことにする。ナップサックに青色のお散歩ネットを入れて持って来ていたので、ためしにこの木のそばに置いて空を見上げてみると、上空に飛んで来たオオルリアゲハが急降下してくるではないか。山本さんが、「来た、来た。」と声をかけてくれるのだが、青ネットに1メートル位まで近づくと仲間と違うことに気づくようで、「ありゃ、しまった。違うじゃないの。」といった感じでUターンして、視界の彼方へ飛び去っていくのだった。こんなふうに、オオルリアゲハの急降下してくる姿は何度も見たのだが、時間が遅かったからか、吸蜜する姿は見られず、写真は、ほとんど撮れなかった。山本さんは、ここをあきらめたのか、下に下りて行ってしまった。



お散歩ネットのトラップ

時刻は2時半、そろそろ村に戻らないといけない。帰り道、ふいに飛び立って葉上に止まった蝶は、キオビコノハ (*Yoma sabina*) だった。その名の通り、黄色の帯が目立つ粋な蝶だ。(カラー写真L) しかし、敏感でなかなか近寄らせてくれない。もう少し、撮りたいと思ったが時間切れた。村の方へと急ぐ。

■ 2月5日(日) バリへ

今日はバリへ戻る日だ。アンボン空港、午前8時発のライオン航空の便に乗り、スラウエシのマカッサルまで飛ぶ。ルディー君とは、ここでお別れだ。マカッサルからバリへ直行すると思っていたら、ジャワ島のスラバヤを経由して行くとのことで、スラバヤ行きの飛行機に乗り替え、そしてスラバヤで今度はプロペラ機に乗り替えて、やっとバリに戻って来た。時刻は、午後1時半。待時間が短かったせいか、遠回りをしたわりには、思ったより早く着いた。

ホテル日航の裏に蝶の多いポイントがあるということで、そのホテルに向かって車を走らせる。ホテル日航近くの空き地に車を止め、蝶を探しながら歩き出す。道沿いには、ランタナの花が咲いている。ここで、見かけた蝶はカバタテハ (*Ariadne ariadne*)、シロオビアゲハ (*Papilio polytes*)、オナシアゲハ (*Princeps demoleus*) (カラー写真M)、ウスキシロチョウ (*Catopsilia pomona*)、メスアカムラサキ (*Hypolimnas misippus*) 等であった。ヨナグニサンと思われる大きな蛾も見た。西條さんの話では、前とはかなり様子が変わっていて蝶は少ないということであった。



上空から見たバリの海岸線



翅の先端部分はヘビの頭のようにも見えるヨナグニサン

■ 2月6日(月) ウルワトゥ寺院へ

今日は、この撮影旅行の最終日だ。午前8時、インドラ君の運転でホテルを出発。今日の目的地は、バリの最南端に位置するウルワトゥ寺院だ。(ここは、昨年5月にも来ているが、この時は、時期が悪かったようで、蝶はあまり撮れなかった。)

1時間位走ると車やバイクの数は激減した。逆に木々の緑が目立つようになり、午前9

時10分、ウルワトゥ寺院前に到着した。入口で、入場料15000ルピア（日本円で約150円）を払い、きれいな色をした布を付けて中に入る。天気は快晴で、焼けつくような日差しだ。

早速、西條さんが、アオネアゲハ(*Papilio peranthus*)をネットインする。翅の内側の金緑色が魅力的な蝶だ。細い道を進んで行くと、わりとゆっくり飛ぶ、一頭のアオネアゲハを見つけた。メスのようだ。後を追うと木の葉にとまって腹部を曲げている。産卵だ。枝にはトゲがあり、葉の形やつき方は、カラスザンショウによく似た木であった。アオネアゲハは、ランタナの花に吸蜜に来る姿をよく見かけ、最盛期のようにであった。葉影で交尾しているものもいた。(カラー写真N)



ランタナで吸蜜するアオネアゲハ

さらに進んで行くと、視界が開け、ランタナの花が咲き乱れているところに出た。忙しそうにランタナの花から花へと飛び移りながら吸蜜している蝶は、コモンタイマイ(*Graphium agamemnon*)だった。(カラー写真O) コモンタイマイも最盛期だったようで、ここでは、一番よく見かけた蝶だ。ランタナの花にとまり、翅を開閉しながら吸蜜しているのは、ユベントヒメゴマダラ(*Ideopsis juvena*)だ。ツマベニチョウ(*Hebomoia glaucippe*)やタイワンキマダラ(*Cupha erymanthis*)も吸蜜にやって来た。アオネアゲハのメスをオスが追飛している。オスの方は必死のようだが、メスの方は吸蜜に夢中でオスには、全く無関心のように見える。他には、オナシアゲハ、シロオビアゲハ、ウスキシロチョウ、ナガサキアゲハ(*Papilio memnon*)等が、次々に吸蜜に訪れ、どの蝶を撮ろうかと迷うくらいであった。

ここから少し先に行ったところで、細い木の枝に止まっていた、ヘリグロホソチョウ(*Acraea violae*)を見つけた。(カラー写真P) 可愛い蝶だが、ハレギチョウと同じく、トケイソウを食草とするところから判断すると、毒蝶なのであろう。ここで他に見た蝶は、イワサキコノハ(*Doleschallia bisaltide*)、ピエロシジミ(*Castalius rosimon*)、オオシロモンセセリ(*Udaspes folus*)等であった。



葉上のピエロシジミ



I 吸蜜するイワサキタテハモドキ



J アリメナムラサキのオス



K アカハレギチョウのオス



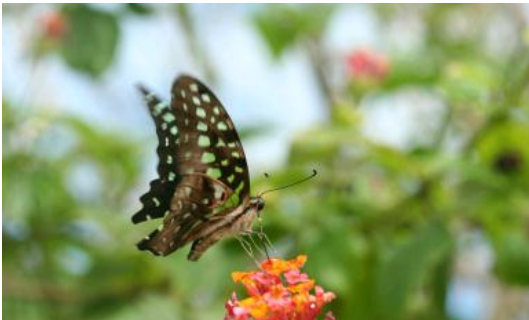
L 葉上のキオビコノハ



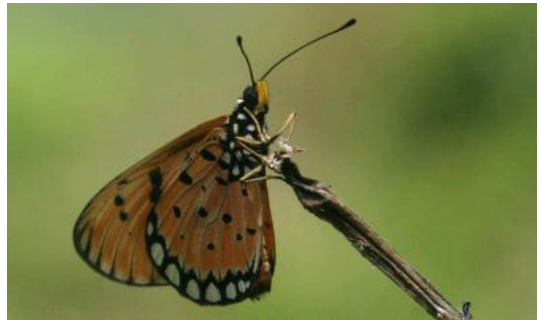
M 吸蜜するオナシアゲハ



N アオネアゲハの交尾



O コモンタイマイの吸蜜



P 枝先に止まるヘリグロホソチョウ

午後になると吸蜜にくる蝶の個体数は激減し、午後2時過ぎには、ここを後にした。ホテルでシャワーをした後、空港へ向かう途中でみやげ物を買う。そして、ガルダ航空の午前1時発882便で帰国の途に着いた。

今回も、この旅に同行してくれたみなさんのおかげで、心に残る楽しい旅をすることができた。末筆ながら、与那国の西條さん、横浜の山本さん、京都の森さん、そしてガイドのインドラ君、ルディー君他、同行してくれた方々に感謝の意を表し、この撮影旅行記を終えたい。



朝焼けの空

■ 追記

上記のように、6日は蝶撮影に関しては最高の一日であったのだが、実は体調は最悪だった。体調不良を訴える方が他にもあったので、前日の夕方に日本料理店で食べた、にぎり寿司が原因と思われる。インドネシアでは、生ものには要注意である。

これから海外に行きたいと思っておられる方のために、私が気づいたことをいくつかあげておきたい。まず、東南アジアの国々では、水道水は飲めないと思った方がよい。ホテルでは、部屋に飲料水の入ったペットボトルを置いてあるのが普通である。歯磨きの時は、この水を使うようにする。ホテルのものでたりなければ買えばよい。

それから、カメラや携帯電話等の電池を充電するために充電器は必須だが、外国ではコンセントの形状が日本と異なるので、その国で使用されているコンセントに合うプラグが必要である。現地でも買うことはできるが、準備しておいた方がよい。また、携帯電話は海外でも使えるタイプのものかどうか確認しておいた方がよい。使えないタイプの場合は、携帯電話をレンタルすることもできる。

害虫にも、気をつけなければいけない。特に気をつけなければいけないのは、蚊とヒルである。蚊については、私は蚊取線香を持参するようにしている。(スプレー式のもの、機内に持ち込もうとすると手荷物検査で没収されてしまう。トランクに入れて預けてしまえば、大丈夫かも知れない。) ヒルについては、ヒルよけソックスを売っている国もあるが、日本国内では購入するのは難しいだろう。事前にヒルがいることが分かっていたら、荷物にはなるが、長靴を用意するのも一つの手である。マレーシアのランカウイでは、ヒルよけソックスをして長靴を履いていたが、ヒルに吸血してしまった。足元は大丈夫だったが、袖口から侵入したらしい。ヒルの場合は、痒みも痛みもないのでやっかいである。私の場合はシャワーをした時に鮮血を見て、初めてヒルにやられたことを知った。

《まつだ としろう 〒920-2133 白山市鶴来大国町ホ94-5》

会員の動き・しゃばの動き

■オスのナナフシ

北陸のナナフシは、メスだけで産卵するものばかりで、オスはまだ見つかっていない。浅地氏が医王山で採集したエダナナフシの幼虫には脚に黒い斑があり、これはオスの特徴らしい。この斑、成長段階で消えるのか、鮮明になってオスになるのか。

■アカエゾゼミの録音調査

最近のICレコーダーは、1回の電池交換で30時間程度は録音でき、設定した時間帯を毎日自動的に録音するタイマー機能も有る。これを使い週1回の電池交換で、1日4時間録音の定点調査を松井氏が始めた。

■白山でアサギマダラの大群と遭遇

竹谷氏、朝8時から約7時間、湯の谷側から甚の助谷方向へと馬のたてがみを次々と越えていくアサギマダラを観察。中には気まぐれもいて、お花畑で一服するもの、行ったり来たりするものもいたらしいが、1分間に1頭以上が通り抜け、500頭程を観察した。

■佐渡でマーキング

佐渡の大脇特派員、大佐渡の標高800m付近でアサギマダラのマーキング実習。初夏の海岸マーキングの実習では目撃もできなかったが、今回は大当たりで10人が4時間ほどで366頭にマークした。

■絶滅宣言

8月28日、環境省は30年以上目撃例がないとして、ニホンカワウソを絶滅種に指定した。1979年に確実な記録はあるが、中型の哺乳類が人目に付かないまま長期間生息

し続けていることは考えにくいと、絶滅が宣言された。石川県のクロシジミは、1978年を最後に記録が途絶えているが、人目に付きにくい小さなチョウの宣言には、やはり50年の歳月が必要と思われる。

■エゾゼミの声が聞こえない

去年は何処へ行っても大合唱だったエゾゼミ類の声が、何処へ行っても聞こえない。今年の少なさからも去年の大発生がうかがえるが、エゾゼミの声が聞こえてこないフィールドは寂しい限り。

■宝達山にアサギが飛来

秋の気配とはほど遠い30度超えの気温が続いているが、自然は確実に移ろいでいるようで、9月3日に宝達山からアサギ飛来の便りが届いた。これからほぼ1月、宝達山はアサギマダラと観察者で賑わう。

■アカエゾゼミ録音結果

1ヶ月以上に及ぶ2セットの録音調査で、アカエゾの声が録れたのは1セットの3日だけ。録音には、その他のセミや野鳥、獣など面白い音もあったらしいが、320時間に及ぶ録音からアカエゾを聞き出すには、思わぬ時間がかかったようで、今後に備えて検出ソフトを依頼中らしい。

■酷暑のめっけもの

30度超えの気温が続き、そろそろバテ気味だが、この暑さで元気になってるチョウがいる。やけどするような海岸をチラチラ飛ぶヤツで、今年は新たな産地が見つかる可能性が高い。既に、F氏、H氏、I氏、M氏が動いている。

■天空の楽園

白山観光新道馬のたてがみは、白山登山の心臓部が箱庭のように見渡せ、辺りは百花繚乱のお花畑。アサギマダラが次から次へと青空の中を通り過ぎて行き、楽園に紛れ込んだようだった。

■風来坊がやってきた

酷暑の今年、どんな風が吹いたのか、3年ぶりにムラサキツバメが見つかった。05年、06年、09年に続く発見で、秋の常連になる日も近いのか。

■サムライとゲイシャ

今年は、ことのほか白山にエルヤクジャクが多い。気温の低下とともに下界に降り、アザミ等に飛来する可能性が有るので、低地での観察チャンスかもしれない。

■静かな宝達山

9月も半ばになると、アサギも人も涌いた涌いたの筈なのに、アサギがいない。30度超えの気温が続き、避暑に訪れる人は多

いが、ネットの数はまだまばら。

■例会の記録■

8月2日(木)浅地メッキ2階にて、午後8時から開催。

今回は、松井氏が実際に行っているインターバル撮影とタイマー録音を紹介。手の届かない場所に居る虫の近接撮影には、インターバル撮影は最適だが、手元のモニターで確認しないと画面に虫が入らないらしい。アカエゾ調査のタイマー録音では、後から処理するデータ量が多いので先行き不安と本音をポロリ。

その他の話題は、メスアカミドリ短尾型、中宮温泉のヒメシジミ、8月に越冬キベリ、湯ノ谷のゴミムシ調査、自衛隊のホソハンミョウ、県庁のクマゼミ要注意、エダナナフシのフアリタイプ、などなど。

参加は、浅地、松井、浅野、大宮、長田、山岸、井村、福富、細沼の9人。

■ ■ 表紙デザイン：小幡英典 ■ ■

目 次

勝海雅夫：ヒサマツミドリシジミの産卵部位について	1
田辺幸雄：ギフチョウの異常型を撮影	2
松井正人：石川県金沢市、富山県旧上平村、富山県旧福光町のクロシジミの記録	3
指田春喜：7大陸で網を振る・・2012年のたわごと・・	5
編集部：短報 218	5
松田俊郎：アンボン・バリ撮影紀行(下)	6
編集部：会員の動き・しゃばの動き	12

翔 218号

Tobu 2012年10月10日発行
百万石蝶談会
金沢市大場町東871-15 松井方

<http://homepage3.nifty.com/100man/>
☎920-3121 ☎076-258-2727
郵便振替 00750-8-562
印刷 小西紙店印刷所

